台大日本語文研究第 14 期
2007 年 12 月，頁 27-46
本文 2007-1219 收稿，2008-0225 通過刊登

楊逵的文學作品對日本文學的受容與變容
——以〈送報夫〉為主——

陳明姿*

摘要

楊逵是日治時代台灣作家當中最受日本文壇肯定的一位傑出作家，其作品〈送報夫〉早在 1934 年便獲日本《文學評論》評爲第二名，可見他也是一位經得起時空考驗的作家。楊逵自出道至今已歷經幾十年，時代也已改變了，但其作品依然受文壇矚目。然而因其生長的時空背景，其作品也深受日本文學的影響，以無產階級作家出道的楊逵作品亦具有濃郁的日本無產階級文學影子，不過愛鄉愛民的楊逵最關心的仍是台灣及台灣人，因此其作品雖受日本文學的影響，卻具有和日本無產階級文學不同的要素，本文主要透〈送報夫〉探討楊逵的作品如何受容日本無產階級文學，並產生何種變容，希冀藉此一窺楊逵文學的特質。

關鍵字：送報夫、無產階級文學、楊逵、受容、變容

* 台灣大學日本語文學系教授

Adoption and Transformation of Japanese Literature in YANG Kuei's Work: *The Newspaper Man*

Chen, Mung-tzu*

Abstract

YANG Kuei was the most prominent Taiwanese writer in Japan during Taiwan's Japanese colonial period. His work, *The Newspaper Man*, has won the second award for the year of 1934, ranked by the famous Japanese magazine *Bungaku Hyoron* (or *Literary Review*). Up to today, more than seventy years have passed but his works still attract a lot of attention of this literary field. However, because of the historical backdrop where he grew up, his works were deeply influenced by Japanese literature. As a proletarian writer, his works contain a strong shadow of Japanese proletarian literature. But since YANG Kuei has intensive devotion to his hometown Taiwan and his people, his works have unique characteristics different from Japanese proletarian literature. This paper aims to discuss how YANG's works adopt Japanese proletarian literature, and how they transform from it, by examining his work *The Newspaper Man*. Through this study, we hope to figure out the characteristics and features of YANG Kuei's works.

Keywords: *The Newspaper Man*, proletarian literature, YANG Kuei, adoption, transformation

* Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

楊逵の文学作品における日本文学の受容と変容
――「新聞配達夫」を中心として――

陳明姿*

要旨

楊逵は日本統治時代の台湾作家の中で、もっとも早く日本文壇に認めてもらった優秀な作家である。彼の作品「新聞配達夫」は早く1934年に『文学評論』に第二席で入選し、十月号に掲載された。

彼がデビューしてから既に何十年も経ったし、時代もすっかり変わったが、その作品は依然として高く評価されている。しかし、楊逵が日本統治時代の台湾で成長した上に、日本留学の経験も持っているためであろうか、彼の作品には明らかに日本文学からの影響が見られる。プロレタリア文学作家としてデビューした楊逵の作品には日本プロレタリア文学の影が深く落ちているのである。それにもかかわらず、故郷と自分の民族を深く愛する楊逵が一番関心をもつのはやはり台湾と台湾人のことである。そのため、彼の作品には、日本プロレタリア文学の影を色濃くもちながら、それと異なる要素も見受けられるのである。小稿は楊逵の文学を探究する一環として、「新聞配達夫」に焦点をあて、彼の作品がどういうふうに日本のプロレタリア文学を受容し、且どのように変容させたのかを考察しようとする試みである。

キーワード：新聞配達夫・プロレタリア文学・楊逵・受容・変容

* 台湾大学日本語文学系教授

楊逵の文学作品における日本文学の受容と変容
――「新聞配達夫」を中心として――

陳明姿

一、序

日本政府は日清馬関条約によって、台湾を領有してから、芝山巌国語練習所設立を皮切に、1898 年 7 月に台湾公学校令を制定、1919 年 1 月に台湾教育令を発布、1922 年 2 月新台湾教育令を公布、積極的に日本語教育を推し進めた。

そのため、当時の知識人は皆日本語で文章を書くことができるようになっていた。又、日本政府が作家達に日本語で作品を書くことを勧めたので、多くの台湾人作家が日本語で文学作品を創作していた[1]。中でも、特に 1934 年に「新聞配達夫」という作品でナウカ社の『文学評論』(10 月号)に掲載された楊逵は注目すべき存在である。楊逵は「新聞配達夫」で文壇に登場した後にも、日本語で「田園小景」(後に「模範村」と改名した)『芽萌ゆる』小説集、「鶯鳥の嫁入」など、多くの名作品を発表した。そして、中華民国政府に変わってからも、中国語で「春光關不住」、「園丁日記」、「智慧之門將要開了」、「才八十五歲的女人」等の作品を発表した。

1976 年になって、「春光關不住」が「壓不扁的玫瑰花」と改名され、国民政府編纂の中学校教科書「国文」第 6 冊に収録された。彼がデビューしてから既に何十年も経ったし、時代もすっかり変わったが、その作品は依然として高く評価されている。しかし、日本統治時代の台湾で成長した上に、日本留学の経験も持っているためであろうか、彼の作品には明らかに日本文学からの影響がみられる。プロレタリア文学作家としてデビューした楊逵の作品には日本プロ

[1] 彭小妍主編「楊逵全集」第十四卷資料卷 p.215「永不熄滅的燭火---光復前臺灣文學中的民族意識與抗日精神」(國立文化資產保存研究中心　中華民國 90 年 12 月)参照。

レタリア文学の影が深く落ちているのである。それにもかかわらず、故郷と自分の民族を深く愛す楊逵が一番関心をもつのはやはり台湾と台湾人のことである。そのため、彼の作品には、日本プロレタリア文学の影を色濃くもちながら、それと異なる要素も見受けられるのである。小稿は楊逵の文学を探究する一環として、「新聞配達夫」に焦点をあて、彼の作品がどういうふうに日本のプロレタリア文学を受容し、且どのように変容したのかを考察しようとする試みである。

二、社会主義文学作者楊逵の誕生――作者と文学・社会主義思想との出会い

楊逵は 1905 年に、当時台湾の台南州大目降街(現在台南縣新化鎮)に生まれた。本名は楊貴であるが、「新聞配達夫」を発表した時、頼和の提案を聞き入れて「水滸傳」の中の英雄人物李逵の名前を借用して、楊逵と改めることにした。彼の家庭環境を見ると、楊逵という人物の形成に兄弟が大きな影響を与えていることがわかる。六人の兄弟であったが、彼が 4､5 才の時に、姉、弟、妹との三人は病気のため、相次いで亡くなってしまったため、彼と二人の兄の三人しか残らなかった。しかし、兄弟の仲はとてもよく、後に医者になった次兄が入婿した家の虐待に耐えきれず自縊してしまったことは、彼にとって大きな衝撃であった。彼が 9 才の時、全台湾を震撼させた「噍吧年」事件が起き、その事件で何千人（何万人という説もある）かが日本軍部隊に虐殺されたという。それを聞いた楊逵は日本人を嫌いはじめると同時に､強い恐怖を覚えるようになる。それは、彼が生涯を通じて、武力や暴力で問題を解決することに反対し、平和を唱え続けた理由であるといえる。彼は当時の日本政府の暴挙に反発を感じてはいたが、すべての日本人に反感を持っていたわけではない。彼は恩師沼川定雄先生に対して、生涯尊敬と感謝の念を抱き続けていたし、楊逵の「回憶録」によると、彼が文学に親しむようになったのは､恩師沼川定雄の導きによるものであることが分かる。

我真正對文學發生興味，應當從小學六年級算起。那時我已十

五歲，由於體弱在九歲才入學，前五年的教師均是台人；六年級是一位姓沼川的單身年輕男性教師，聽說他後來在台中一中任教，但遺憾的是一直未能與他見面，如今亦應已經作古了。

由於我在小學時一直名列前矛，沼川老師對我也特別疼惜。六年級時即邀請我到他家中，為我免費教授將來上中學時要讀的英語和代數，他這種精神，在現時的學校老師，也是不多見的。

除了教我上中學時要讀的英語和代數之外，還提供我很多文學讀物，我即神遊其中以致廢寢忘食。到了後來進中學時，更因課程十分有把握，而把全副精神投在閱讀課外讀物上，經常看這些書看到天亮，白天到學校則在課堂上呼呼大睡。

這是我文學啓蒙期的經過。直到現在，文學仍是我生活的重心，也是對於文學有了深厚的興趣，才赴日專攻文學，因而目睹了當時社會的不平等的現象，而促成我日後返台參加社會運動的決心。[2]

おそらく、沼川先生にめぐりあわなかったら、楊逵という作家も存在しなかったろう。沼川先生の薫陶により、文学に強く興味を持ち、台南二中での三年間も文学と思想関係の本を愛読していた。彼の読んでいた文学作品の大半はロシアとフランスの作品である。又、思想方面では、社会主義の本を愛読していたという。特に彼がこれらの書物を愛読した以上、社会主義思想やプロレタリア文学の影響を受けたのも当然のなりゆきであろう。又、殖民地とはいえ、当時の中学校の日本人教師は非常に開けていて、生徒達にものごとに対して批判精神を持たせるような方法で教育を行っていた。楊逵は一度、作文の中で、新渡戸稲造の儒教的色彩の濃い修身書を批判したことがある。その作文は担任教師に大層賞賛された上に、教室で生徒全員に披露されたという。このような教育を受けたため、楊逵が社会の様々な不平、不正に対して、批判的な態度を取ったのも当然なことであろう。1924 年 8 月、彼は強い知識慾と童養媳（両親は息子の意思に拘らず、将来、息子の嫁にするため幼時から迎え入れた養女。

[2] 同註一 p.53。

当時の台湾のいなかではやっていた風俗である）の問題で悩み、ついに台南二中を退学し、日本へ文学の勉強に旅立つことになる。日本へ着いてから、彼は順調に日本大學専門部文学芸術科夜間部には入学したものの、当時は経済恐慌の時期で、経済的状況が悪く、家からの仕送りも途切れ、まともな仕事も見付けられなかった。彼は新聞配達夫、土方及び各種の日雇い人夫をして凌いでいたが、三食をろくに食べることさえできなかった。当時の社会には様々な不平不正が存在しており、そのため、ストライキよく起きていた。正義感の強い彼は、そういった社会に憤慨をおぼえ、学内の社会運動組織に加入し、他の学生達と一緒に町角で講演したり、ビラやチラシを配ったり、資本主義の罪を宣伝したりする活動を積極的に行っていた。このように、彼の日本での三年間の勉強は、学校での勉強というよりも、社会的、思想的なことを自学自習する勉強と言った方が適切であろう。彼は思想的に社会主義に傾いただけではなく、立派な社会主義実践者にまでもなっていたのだ。それゆえに、彼の小説においても彼自身が精神的基盤としてもっていた社会主義の色彩が色濃く現れている。

三、「新聞配達夫」の成立

1926 年になり、台湾農民組合が設立されるのだが、指導者不足のため、1927 年に楊逵は召喚され帰台することにした。常務委員として選ばれた彼は、主に特別活動隊の政治、組織、教育の指導に当ったが、その後、竹林争議の方針をめぐって、主要幹部簡吉と意見が合わず、農民組合での職務を剥奪されることになった。翌年台湾文化協会の議長になった彼は、農民や労働者のため、政府と財団の圧迫に対する抗争を続けながら、高雄で「新聞配達夫」を書き上げる。その作品を当時『台湾新民報』で顧問を勤めていた頼和を通して『台湾新民報』で発表することになるのだが、前半だけが掲載され、後半は発売禁止処分を受けてしまった。だが、1934 年に東京の『文学評論』に楊逵「新聞配達夫」が第二席で入選したため同誌の 10 月号

に掲載された。「新聞配達夫」が日本文壇にもっとも早く認められた台湾作家の作品である。物語自体は虚構であることに違いないが、一人称で書かれ、彼自身の体験や見聞にもとづいて語られたものなので、当時の読者に共感を起させたことは当然であろう。

物語の筋はおよそ次のようである。東京で苦讀する台湾青年楊君が一ヶ月かかってようやく仕事を見付けたところからはじまる。「私」の父は二反歩ばかりの田と五反の畑を所有する自作農であったため、本来生活に困ることはなかったのだが、数年前、製糖会社が農場を開設することを理由にして、村の人達から土地を強制的に廉価で買い上げる。ところが、「私」の父は土地売却の捺印をすることを拒否したため、拘留され、拷問を受けたあげく、土地を奪取されてしまう。そして、釈放された父は病床に伏したまま、50 日目にあっけなく世を去る。母もそのために病気になってしまう。会社から土地の代価としてもらった 600 円（時価は 2000 円だった）は父の病気、母の病気、父の葬式で、殆ど消え、母はようやく病気から回復したものの、その後、牛や農具を売って食べなければならない境地に陥ってしまう。そこで、「私」は立身出世の志を立て、東京に出て行くが、母が持たせてくれたわずか二十円の金は一ヶ月経った今、六円二十銭しか残っていなかった。そのため、やっとのことで新聞配達夫の仕事を見付けたわたしは、天の救いとも言えるほどの喜びを感じる。そして、「私」は「人の倍も働いて、人の倍の勉強をしよう」[3]（p 203）と考えていた。が、喜びも束の間であった。やがて、店の主人に毎日十五人の新読者を勧誘するように命じられる。「私」は毎朝六時から夜九時まで働いたが、なかなか十五人を勧誘できず、二十日目に、ついに保証金を没収された上に、店から追い出されてしまう。後に、同僚の田中から、この新聞舗の主人はよくこのような卑劣な手法で職を探している人の保証金を騙し取っていたという

[3] 小稿にある「新聞配達夫」本文の引用及びページ数の表示はすべて「新聞配達夫」(『文学評論』第一巻第八号　ナウか社　1934 年　10 月）にある日本語で書いた「新聞配達夫」p199-233 に拠る。

ことを聞く。田中は金を貸してくれた上に、労働者達の利益を守る方法を「私」に話してくれる。

彼は伊藤という人物を紹介し、「私」は伊藤から台湾の人々を苦しめる日本人は、実は日本で貧しい人々を搾取する人達と同じ種類の人間であることを知る。伊藤は「私」に様々なことを教えてくれた上に、新しい就職先まで世話してくれた。

数ヵ月後に、例の新聞舗で、ストライキが起きた。「私」は新聞舗主人を殴りたい欲望を抑えて、彼に新聞配達夫達の要求を承諾させ、労働条件と待遇を改善させるのだった。

そして、「私」はさらにここ数ヶ月勉強してきた方法で、台湾の社会をも改革しようとするのである。それは、私の日本での経験を台湾の社会の中でも再現しようとするものである。

簡潔にいうと、農民階級出身の「私」は台湾で搾取されたために、日本へ出口を求めてやってくるのだが、日本でも同じような目に合わされてしまう、すっかり絶望の深淵に突き落とされたまさにその時、幸いに日本の労働者が手を差し伸べてくれ、闘争経験者にも資本家との闘争方法をおそわり、一被害者から搾取者と闘争する指導者となり、闘争に勝利を収める。だが、「私」はこれで満足するわけではなく、さらに日本で習得した闘争方法を台湾に持ち帰り、台湾の人々を指導して、圧迫者や搾取者達と立ち向かっていこうとするストーリーである。ここには、農民組合の召喚に応じて台湾に帰って来てから、農民や労働者を指導し、搾取者と闘う作者の心境が反映しているといえよう。

四、「新聞配達夫」と「総督府模範竹林」

楊逵は日本の社会運動に参加したばかりでなく、当時プロレタリア文学系統である「『文藝戦線』『戦旗』などの雑誌を文字どおり、むさぼるように読み」[4]又、佐々木孝丸の前衛演劇研究室に通って、

[4] 楊逵「一台湾作家の七十七年」(『文芸』1983年1月号－五十年ぶりの来日を機に語る) P.300。

「秋田雨雀、島木健作、窪川（佐多）稲子、葉山嘉樹、前田河広一郎、徳永直、貴司山治といった」[5]プロレタリア文学系統の作家達と知り合ったことで、「雑誌にも投稿するようになった」と自らが回想しているように、日本で彼がプロレタリア文学の影響を受けたのは自然なことであったろう。徳永直はかつて楊逵の「新聞配達夫」について次のような評を加えたことがある。

> 田中などは比較的によく出てゐるが、決して充分ではないし、特に郷里における母にせよ、伊藤にせよ、「生きた性格まで躍如とした」というには可なり距離があるやうに思へる。さらにあの小説の構成という点でも、何となくバラバラな感じがする。新聞舗と郷里とが同じくらい、大きさで突っぱってるやうに感じられる。どっちかへ重心を置いたらもっと効果的であろうと思はれるし、主人公の帰台もあまり必然的に感じられない[6]。

徳永直に指摘される通りである。この小説は「台湾篇」と「日本篇」と二つに分けられるような感じを受ける。そして河原功氏によると「台湾篇」、即ち、製糖会社が強制的に「私」の家の土地を買収するという部分では伊藤永之介の「総督府模範竹林」「平地蕃人」の影響を受けている[7]。「総督府模範竹林」は 1930 年『文芸戦線』第七巻第 11 号に掲載された作品である。

「総督府模範竹林」は三菱製紙会社が農民達の所有している竹林を強制的に廉価で買収する話で次のようなストーリーである。

主人公の黄邱は先祖代々守って来た竹林を売ることを拒否し、留置場にほうりこまれ、拷問される。彼は仕方なく土地を手放すが、その後大変悲惨な目に会う。家財、農具、牛を全部売って、地方を転々としなければならない上に、連れていた二人の子供まで手放さなければならなくなる。あげくのはてに彼自身も拘留される身となってしまう。彼はついに復讐の心をもち留置所を出たら、日本政府

---

[5] 同註四　P.301。
[6] 徳永直「形象化について」(『台湾文芸』第二巻第二号　1935 年 2 月)p13-14。
[7] 河原功「楊逵『新聞配達夫』成立背景」『よみがえる台湾文学』(東方書店　1995 年 10 月) p 301－307。

から「匪徒」とされる首魁可鉄のところへ行こうと決意を固める。

伊藤永之介と楊逵の作品は製糖会社と製紙会社との違いがあるが、政府当局と資本家が癒着して、人民の土地を強制的に廉価で買収するという点では一致している。又、土地を手放した後、家財、農具、牛まで売らなければ食べることができないという設定も大変類似している。ここにとりあげられた三菱竹林争議は当時ではよく知られた事件で、楊逵も農民組合を代表して調査に行ったことがある[8]。そして、その事件については、伊藤氏も座談会か何かで楊逵から聞いたことがあるという[9]。又、楊逵自身も伊藤永之介の書いた「総督府模範竹林」「平地蕃人」のことを知っている[10]といったので、相互に影響があることは十分に考えられよう。

ここで「平地蕃人」をみてみよう。この作品は 1930 年 12 月『中央公論』第四五巻第十二号に掲載されたものである。そのあらすじは次のようである。

卑南警官派出所の巡査補を勤めているミカが、かつて恋心を抱いてるライサに会いに、一年ぶりで家に戻って来た。戻ってみると村の水田は製糖会社に強制的に貸し出されていて、村人は何かにつけて人夫に狩り立てられることが多くなっていた。安い賃金で村人は牛馬の如く扱使われているので、誰しもが村から離れたいと思っているものの、村から離れると、牛六頭を差し出さなければならないため、農民達も村から離れられない。ミカが家に戻った時期はちょうど甘蔗の収穫期で、ライサやライサの母親も甘蔗園で働いている。雨の中でも甘蔗の刈り取りはつづくため、ミカは見るに見かねて、自分が巡査である身分を忘れ、皆に休むように言う。だが、運搬車と一緒に来ていた原料係はそれを許さず家へ帰っていく農夫達に追いつき、ライサの頬をはり飛ばした。その出来事を目のあたりにしたミカは激怒し、竹の棒で原料係を突き刺した。

---

[8] 『台湾民報』第 197 号（1928 年 2 月 26 日）では「本部では協議の結果、楊貴君を派し、台南州清水君を派遣し、実情調査に赴かしめた」とある。
[9] 註七同掲書 p 307。
[10] 同註九

この作品を見ると、製糖会社に土地を貸し出された後、村人が悲惨な目に会うというおおまかな筋は「総督府模範竹林」、そして「新聞配達夫」と類似はしているが、台湾先住民の英雄譚、恋物語も取り入れられており、むしろそちらの方が重点のようである。労働争議に重点が置かれない点から見ると、「総督府模範竹林」ほど「新聞配達夫」に類似はしていない。

日本統治時代には、日本政府が資本家や大手企業と癒着して、台湾農民の土地を強制的に徴収して、会社の農園などにする事件が度々起きていた。楊逵自身も竹林事件の調査に参加したりしたことがあるので、そういった事件の一部始終と農民に対するしわよせなどについてはよく知っていたはずだが、「新聞配達夫」を書くに際して、さらに伊藤氏の「総督府模範竹林」などの先行作品の描写方法を参照にしたことも十分考えられる。

五、、「新聞配達夫」と「海に生くる人々」

先にもふれたように、「新聞配達夫」は二つの部分に分けられるが、もう一つの部分は製糖会社事件の他の日本新聞舗での事件である。

河原功は楊逵の「新聞配達夫」が彼の「自由労働者の生活断面－どうすれば、餓死しねえんだ」（1927 年 9 月に『号外』第一巻第三号に発表した）の延長線にあると指摘したが、それは新聞舗での事件の部分についてのことだと思われる。「自由労働者の生活断面」のあらすじは次のようである。

東京にある木賃宿の屋根裏の 8 畳間に 12 人が寝ころんでいる。全員雨のため、日雇いの職にあぶれ、飢餓に耐えかねている。主人公は昨日の飢えをしのぐためにレーニンの「帝国主義と民族問題」という本を古本屋に売って、ようやく昼食と夕食にありつけたという有様である。今日はもう売るものさえ残っていない。先日、24、5 才の若者伊藤さんが二日間も食べなかったため、自分の担いでいた三十余貫の砂利の下敷になって死んだことを思い出し、恐怖感に襲われている。そこへ、金子という若者が資本家が労働者に対して長

時間労働の強制と低賃金による搾取をしているから、皆悲惨な目に会うということを主人公達に理解できるように語る。そして、「同志を沢山集めるのが一番大事だ。さうして命かけて戦ふのだ」[11]と労働争議の必要性を説く。そこへ、木賃宿の主人の連絡によってやってきた、大勢の警官隊が争議に参加した人々を無理やりにひっぱり出してしまう。そして、最後に「私の振り返った時、先のよぼよぼ爺さんは死人の顔をして、二人のサーベルに引きづられて来た。これも資本家の×だ、私は総てのからくりが今になって分ったやうな気がした。私の目は熱くなった。私の胸は火で燃え立った。」[12]で締めくくられている。

資本家に搾取され、労働者達が悲惨な境地におかれていることを強調する点と有識者或いは経験者の説明によって労働者意識に目覚める点は、確かに「新聞配達夫」と軌を一にするが、「自由労働者の生活断面」は前後の設定に矛盾した所も見受けられる。例えば、レーニンの『帝国主義と民族問題』を読むことのできるインテリがなぜ最後になって、ようやくこれが資本家のからくりだと分かるようになったのか。この反応は不自然に感じられる。労働者が搾取されないように、労資争議が必要だと説くのも、当時のプロレタリア文学の常套的な書き方であるし、楊逵もそれを知っているはずである。即ち、楊逵は「新聞配達夫」の原型といわれる「自由労働者の生活断面」を書く段階で、既に日本のプロレタリア文学を参考したと考えるべきであろう。「新聞配達夫」の方では、主人公が労働者意識に目覚めたばかりでなく、労働運動の経験者に闘争方法をおそわり、新聞舗の労働者達をリードして、ストライキを起し、その上、この闘争経験をいかし、故郷台湾の社会をも改革しようとする、ということまで付け加えられている。

しかし、このように社会の改革というところまで語られるという

[11] 揚貴「どうすれあ餓死しねえんだ？―自由労働者の生活断面―」（号外九月号第一巻第三号） p 46。
[12] 註 11 同掲書 p 46－47。

点では、「新聞配達夫」は、「自由労働者の生活断面」を描くことよりもっと「海に生くる人々」を始めとする先行プロレタリア文学に類似したものだといえよう。

まず、作品の表現から見ると、作者が暗示的な書き方をした箇所がいくつか見受けられる。一つは、同僚の田中さんが楊君に新聞舗主人の搾取から皆を守る方法を教えてくれた時に、物語の中で「耳新しいこと」（p 230）とはあるが、何を教えくれたのか、具体的な説明が行われていない。ただ主人公楊君を通して、簡単に要約させただけである。労働運動やプロレタリア文学を知っている人なら「ストライ〃〃（ママ）」（p 230）と「一緒になって、皆が一心になって、主人に當り、聞かれない場合は一致の行動をとる〃〃（ママ）」（p 230）とあるところから、「ストライキ」という集団的な闘争をやることであろうと推測できるが、そういう知識のない人達にはちんぷんかんぷんであろう。又、田中さんが耳新しいことを私に教えた後、さらに続いて、

> 「その人がね…君に会いたいと言ふんだよ。僕が君のことを話してやったら、『そうか〃〃（ママ）台湾人にも、そういう目に会った人があったのか』と言って、『是非会いたい。直ぐ紹介して呉れ』と田中はその男の希望迄私に話して呉れた」（p 230－231）

といった。これも禅問題のような書き方である　。「その人」については一応名は伊藤であると紹介してくれたが、その他、彼の出自や職業などのことについては一切書いていない。それなのに、主人公は「早く会ひたい」と思ったのである。というのは、「その人」が「苦しめられている新聞配達夫、失業者達に、鬼畜のような主人に対抗する方法を教へることを心得てゐる人」（p 231）なので、きっと「私の故郷の人達に対しても、何らかの助言をしてくれる」（p 231）と考えていたからである。これも一見すると、曖昧不明な書き方であるが、プロレタリア文学を知っている人なら、「その人」が労働運動の指導者であることなどは了解しているだろう。

又、伊藤さんの世話で浅草のある玩具工場に勤めた後に、

私は規則正しく閑の時間を利用してママ　。（p 232）

こうして数ヶ月後には、私を追い出したXX新聞舗に於いて、ストライキが捲き起された。（p 233）

とある。これも「閑の時間を利用して」何をするのか、まったく語られていない。しかし、その数ヶ月後に、「新聞舗でストライキが捲き起された」（p 233）こととあることから、先行プロレタリア文学を読んだことのある人達には、その間に、主人公が伊藤さんに闘争の実践方法を教わりながら、新聞舗の人達を組織し、新聞舗主人と抗争することを準備していたことが容易に想像されよう。そして、作者のそういった暗示的な書き方からも分かるように、この作品は先行プロレタリア文学を土台として書いたものであるといえよう。この作品を理解しようとしたら先行プロレタリア文学を抜きにしては語れないと思われる。

楊逵が先行プロレタリア文学を何篇読んだかはっきり分からないが、葉山嘉樹の「海に生くる人々」はその一つに数えられると思う。「海に生くる人々」は労働者の集団的闘争を描いた最初の作品で、後の小林多喜二の「蟹工船」にも影響を与えた作品である。この作品が発表された1926年、楊逵はまだ日本に滞在しており、佐々木孝丸の自宅で葉山嘉樹とも面識をもっていたので、プロレタリア文学作家を志した楊逵がこの作品を読んでいたであろうことは想像にかたくない。又、この作品は当時のプロレタリア文学の内容と構成に大きく影響を与えたものでもあり、日本プロレタリア文学の型を知るためにもこの作品を見なければならない。ここでは、まず葉山嘉樹が1926年10月改造社に発表した「海に生くる人々」を見よう。

暴風雪の中、石炭船万寿丸は、水夫室にまで石炭を積み込んで、未明に室蘭を出発する。資本家は金儲けに熱中して、労働者の生命を危険にさらすことなど平気だった。十七歳のボーイ長安井が作業中に怪我をするが、船長は手当らしい手当も与えずに水夫室に放置する。また、難波漂流している汽船を見つけても、船長の命令で救助しない。労働運動の経験をもつ倉庫番の藤原、『資本論』を読みか

じっている波田、舵手の小倉の三人が水夫見習の負傷手当を船長に願うが、船長はこれをも拒否する。これがきっかけとなって、富原らを中心に、水夫たちが組織され、やがてストライキに発展していく。船が横浜から室蘭に引返し、正月を横浜で迎えるために、ふたたび室蘭を出帆するという日の朝、八時間労働制ほか七ヵ条の要求を承諾させる。しかし、横浜に着くと同時に、藤原らの指導者は警察に引渡され、正月を留置所で迎えねばならなかった。

以上が「海に生くる人々」の概要である。

「新聞配達夫」と「海に生くる人々」との間には、およそ次のような類似点が見られる。即ち、

一、最初は両者共に労働者（『海に生くる人々』）か失業者（『新聞配達夫』）が資本家に搾取されたり、騙されたり、悲惨な境地に陥った様子が語られている。

二、それに対して、同僚が被抑圧者、或いは被害者に同情して、援助を行ったことが描かれている。

三、労働運動の経験者が現れて労働者全員の利益を守るために主人公（たち）に資本家と闘争する方法を教えたことが描かれている。

四、集団的闘争によって、資本家或いはその代表者が労働者達の要求を聞き入れるように行動する。

しかし、先行プロレタリア文学をふまえて書いたとは言っても、植民地である台湾の事情は日本のそれと違っているので「新聞配達夫」に日本の先行文学と異なるパターンも見ることができる。伊藤君に「日本人が好きかね」と聞かれた時、何と答えていいか分からなかった主人公の「私」は次のように答える。

台湾で会った日本人には、好きになれさうなのは滅多になかったからだっだと言って、現に僕は、木賃宿の主人、田中等が好きである。こんなことを聞く當の本人伊藤君も初印象から好きになれそうである（ｐ231－232）

主人公は決してすべての日本人が嫌いと言っているわけではない。

故郷にいる日本人の手先になった村長達よりも木賃宿の主人、田中、伊藤などの方が好きなのである。そのため、「私」は一寸考へて、次のように言葉を継ぐ。

「台湾に居る時は、日本人を悪い人とばかり思つてゐたが、田中さんは非常に親切な方だ！」と答へてやつた。

「さうだ、日本の労働者は、大抵田中さんのやうに、いゝ人だよ。……、台湾の人達が押しへつけられ、いじめられるのに反対なんだよ。台湾人を苦しめる人達はな……さうだ……君の保証金を奪つた上に、追ひ出した、あのおやぢのやうな鬼畜達なんだ。台湾に行つてゐるのは、こんな性根の人と、この鬼畜達の手先が多いからな！併しそんな鬼畜達は、台湾の人達に対してばかりではなく、我々本国の貧しい人々に対しても、……、……達をも苦しめてゐるのだよ。……つまり、今の世の中は、金を持つてゐる人が、その上に、貧しい人々の働きを奪ひ、うまく奪ふ為に押へつけてゐるのだから…」

彼の言葉は一々私の脳底に響いた。私はよく理解することが出来た。故郷の村長は、台湾人であるに拘らず、明らかに、彼等とくついてゐる村の衆を苦しめてゐるから…

私は村の有様を色々話してやつた。彼は非常に注意深く聞いて、「さあ！手を握らうぢやないか！君等を苦しめ、我等を苦しめるものは、同じ種類の人間だ！……！」

と頬を紅めて、興奮して言つた。（p 232）

田中の言葉はまずしい労働者達は人種、民族を問わず、一致団結して、抑圧者、搾取者と闘うべきだということを「私」に伝えるものである。そして、「私」は伊藤君の話をよく理解して、台湾に帰っても、そういう方法で台湾の社会を改革しようと考えている。しかし、当時の台湾は植民地で、「台湾で会った日本人には、好きになれそうなのは滅多になかった（p 231）」とあることからも分かるように、台湾にいる日本人の大部分が台湾人民を苦しめている圧迫者、搾取者であった。製糖会社の件を取ってみても分かるように、台湾

の現状は資本家ばかりでなく、巡査、日本政府まで一つになって、台湾の人たちを圧迫し搾取しているものである。特に不公平や不合理な政策を制定し実施していた台湾での日本総督政府こそ台湾人民の最大な敵である。したがって、彼が台湾社会を改革しようとするなら、勢い台湾にいる日本人、特に当時の日本総督政府と対決するという構図を抱え込むことになる。いわば階級闘争から民族闘争へと発展していくことは自然な流れである。そして、それも楊逵が一社会運動家から反殖民地統治の闘士へと変わっていく原動力であったのは間違いない。

しかし、残念なことに、「新聞配達夫」の後半は台湾で発表できなかったし、その全文を掲載した『文学評論』10 月号も台湾で発禁となったので、この作品は当時の台湾読者には読めなかった。1936 年、胡風がこの作品を中国語に訳して『山霊－朝鮮短篇集』(上海文化生活出版社）に収録し、大陸で大変好評を博したが、台湾の読者には依然無縁のものであった。終戦後の 1947 年に、胡風訳の「送報夫」（「新聞配達夫」）が東華書局より出版された『中国文芸叢書』第六輯に収載され、これではじめて台湾の読者は「送報夫」を読むことができた。1974 年に、『幼獅文芸』（九月号）に「新聞配達夫」が再び掲載されたが、その内容の一部分は既に楊逵によって修正が行われたものである。

六、結び

楊逵は沼川先生の薫陶を受け、文学や思想の方面の本を愛読し、日本の大学で勉強する力を培って来た。そして、まさに日本で勉強していた時に、日本ではちょうど社会主義の全盛期に入った時代で、その風に吹かれ、楊逵は社会運動家となった。そのため、彼の小説にも社会主義的色彩が色濃く影を落していることは否定できない。彼はさらに日本で学んで来た闘争方法を用いて台湾社会を改革しようともした。しかし、当時の台湾は植民地であり、日本とは事情が異なっていた。そのため、台湾の社会の不公平、不公理な現象を改

善しようとするなら、その抵抗は当時の統治者、日本総督政府に立ち向わなければならなかったのである。このような状況を考えると、彼の代表作「新聞配達夫」にも先行プロレタリア文学の影響を受けながら、階級闘争から民族闘争へと発展する兆が見られるのである。

付記：この論文は 2004 年 1 月、東京大学において開催された国際シンポジウム「近代日本・台湾における異文化要素受容の位相」（東京大学比較文学比較文化と台湾大学日本語文学科との共催）での発表論文をもとにして、書き換えたものである